

令和2年度 第2回新潟市歴史博物館運営協議会 会議録要旨

【日時】 令和3年3月5日（金）
14時30分～16時00分

【場所】 新潟市歴史博物館セミナー室

【出席委員】 池田 哲夫 会長 （新潟大学人文学部名誉教授）
本井 晴信 副会長 （元新潟県立文書館 副館長）
石田 克弥 委員 （日本旅行業協会 新潟県地区委員会 委員長）
上村 啓 委員 （BSN新潟放送 事業局次長兼事業部長）
久保 有朋 委員 （古町花街の会）
坂井 孝 委員 （新潟市立南浜中学校長）
佐藤 忠浩 委員 （新潟日報社 読者局 事業担当部長）
渋川 綾子 委員 （にいがた湊あねさま倶楽部）
津野 治彦 委員 （新潟市立亀田小学校長）
橋本 博文 委員 （新潟大学人文学部名誉教授）
羽生 頼子 委員 （公募委員）

【オブザーバー】 遠藤 和典 新潟市歴史文化課 課長

【事務局】 伊東 祐之 新潟市歴史博物館 館長
小林 隆幸 新潟市歴史博物館 副館長
伊藤 泰介 新潟市歴史博物館 総務担当次長
大森 慎子 新潟市歴史博物館 学芸担当次長
鷲尾 雄二 旧小澤家住宅 館長
石田 孝子 新潟市歴史博物館 企画普及課長
森 行人 新潟市歴史博物館 学芸課長
設楽 明子 新潟市歴史博物館 職員
高橋 久美 旧小澤家住宅 職員

【 次 第 】

1.開 会

2.館長挨拶 詳細別紙

3.議事

(1) 令和2年度の館運営報告状況

1) 博物館

2) 旧小澤家住宅

資料 1～4 に沿って、事務局から説明。

(2) 令和3年度事業計画書

1) 博物館

2) 旧小澤家住宅

資料 5～6 に沿って、事務局から説明。

《 質疑応答 》 詳細別紙

3.閉会

《館長挨拶》

(伊東 館長)

本日はご多忙の中、ご出席いただきありがとうございます。現在の新潟市芸術文化振興財団によるみなとびあ旧小澤家住宅の指定管理は今年度で終了するが、来年度以降の指定管理についても先日議会で承認いただき引き続き5年間の指定管理を受けた。市の財政が非常に厳しい中で、財団全体としても市からの補助金・指定管理料が大幅に削減され苦しい運営になる。当館も人員減・予算の削減を受けたが、指定管理の初年度でもあり、歴史文化課にご尽力いただき来年度の指定管理事業は何とか遂行できると考えている。今まで通り自主事業を行って館運営を補うことは変わらない。財団の議決が必要となるが、歴史発見プロジェクトの基金を設けて寄付金を募り、事業収入を増やして事業を行う努力は変わらず必要。世界中で同じだが、新型コロナウイルスの影響で今年度実施できなかった事業、頑張ったが市民の方に見ていただけなかった企画もあった。来年度も見通しが見えないところがあるが、事業をしっかりと実施し、多くの方に来ていただくよう努めていく。

今年度の事業報告、来年度の事業運営等についてご意見を承りたい。限られた時間ではあるがよろしく申し上げます。

《質疑応答》

(津野 委員)

コロナ禍の先の見えない中で工夫されていることと思うが、学校の方からすると、子どもたちは今、全員タブレットを持っていてインターネットにつながる環境にあるので、子どもたちが自分たちでみなとびあのホームページに入って、新潟の歴史を学べるような工夫があるといい。一方で本物を見られるのがみなとびあの魅力なので、昨年もお願いしているが、年に5校でもいいのでバスの半額補助など、今まで交通費が理由で来たことのない学校が来れるような工夫をしていただきたい。

(小林 副館長)

ご意見の通りインターネットで見られるのは重要だと思う。今回、学校が休校になったことを踏まえて「おうちみなとびあ」「おうちミュージアム」をホームページで公開した。バスが確保できずに博物館に来れない、という問題について、博物館の方でバスの補助というの難しい。そこで、逆に展示品をパッケージしたものを学校の方へ持ち込むことを進めている。

(池田 会長)

予算との兼ね合いもあるだろうがご検討いただきたい。

(久保 委員)

二点あるが、一点目。来年度事業について、みなとぴあと旧小澤家住宅両館とも桜井進一さんの写真展を企画されている。時期はずれているが、それぞれの館の関係性や資料が重複しているのか。どういう分け方でそれぞれの館の色を出しているのか。

(小林 副館長)

みなとぴあについては、桜井氏の写真展示の企画は「みなとの博物館ネットワークフォーラム」の助成をいただいて実施する。これは『港』『海』がテーマでないと補助が受けられないので、どのように港の景観が変わってきたかというところに主眼を置いている。あくまでも水辺中心となる。

(鷺尾 館長)

旧小澤家については、西堀の『街』を中心としている。小林百貨店など建物や堀などの写真が多くなる。基本的に展示品・テーマのダブリは生じないと考えている。

(久保 委員)

大変楽しみになってきた。

もう一点。今月、旧第四銀行住吉町支店のカーブドッチが閉店する、と新聞記事で読んだが、市の方が観光客の集客を図るために新規事業者の公募を検討すると書かれていた。集客を真剣に考えられるならみなとぴあとの連携を考えられた方が適切なのではと思うが、何か連携するような枠組みができているのか。

(遠藤 歴史文化課課長)

基本、市の資産となり、新潟市がカーブドッチさんに場所を提供している。残念ながら3月末で退店されるが、長期にわたって利用していただいたので設備点検等を行ったうえで、少し時間をおいて募集させていただきたいと考えている。新潟市の行政の方で業者を選定する。

(池田 会長)

連携という観点ではいかがでしょうか。

(遠藤 課長)

当然、指定管理者のみなさまと情報共有し、ご案内させていただく。

(本井 副会長)

連携という点で、思いついたが、第四北越銀行の金融資料室ともう少し連携できないものか。新潟の明治以降の歴史資料が詰まっているので、双方で楽しめるようなコースがあればいいと思う。銀行側が積極的に望まないのかもしれないが、もう少し働きかけて、楽しみを求めてくる観光客などに案内もできるのではないか。組織が変わって新しくなるのをチャンスととらえて働きかけては。

(池田会長)

第四北越銀行合併に伴う連携も考えていただきたい、というご意見ですが、いかがでしょうか。

(小林 副館長)

数年前に第四銀行展を開催したときは資料のやりとりもあり、半分くらいは提供いただいたものを展示した。残念ながら、連携そのものを持続していきましようという話にはならなかった。いい案だと思うので、今後考えてみたい。

(渋川 委員)

資料を拝見すればするほど、コロナ禍の中でたくさんの催しを考えられ実施されたことに感心する。中でも旧小澤家の「おやつの日」はとても親しみやすい。出店なのか仕入か分からないが、物販を行えば地域の経済の循環にもなり良いことだと思う。継続されているところをみるとそれなりに集客があつてのことと思うし、小澤家の中で飲食するのも特別感があるのでぜひ継続していただきたい。

来年度のみなとぴあの事業に1つ提案を。来年度、お祭り、1年の年中行事の展示を考えられているが、どうしても中央区以外の方は外された感がする。どういふことに軸足を置くか分からないが、8区の違いと共通性が分かるパネル1枚でもいいのでまとめて掲示するだけでも広がりが出ると思うので少し意識して欲しい。

(小林 副館長)

これからもう少し内容を詰めていかなければいけないが、農村地域については習俗的なものを集めて展示していきたいと思う。

(石田 委員)

将来的な来館者目標数値の設定があるか。無い場合は設定の必要があると思う。プロジェクションマッピングの数値データがあれば教えていただきたい。

将来の来館者と言うのは、目標を設定すると、もっと集客できるような知恵を外部から意見として貰える。そうやって設定した数字に向けて進んでいくことが必要かと思う。

p.23 旧小澤家の婚礼料理展について。料理の展示だけでなく、限定20名・30名でもいいので、金額高くてもお客さんは来るので、これを食べてもらうような企画を考えてはいかがか。

(小林 副館長)

目標は基本10万人を設定し、年々増加していくといいと考えている。プロジェクションマッピングは残念ながらイベント自体が閉館後のため、イベントを目指してきた方が博物館に入るといのはほとんどないと言っていい。博物館の存在周知には効果あったと思うが、直接入館者増には繋がっていない。

(鷺尾 館長)

指定管理提案書で数値目標としてあげたのは、令和3年度1万5,500人。その後毎年500人ずつ伸ばす。開館9～10年となり、新潟市内で小澤家に興味のある人の来館は一巡したと考えてよいと思うので、今後は企画展やイベントで集客を図る。外に向けては、新潟に来た観光客の一部が小澤家に回ってくれるような工夫が必要と考えている。

婚礼料理の件、非常にいいアイデアをいただいた。見るだけではつまらないので、小澤家当主と著名人とで婚礼料理の一部を試食する場を設け、テレビ・新聞・雑誌に取材してもらえるように考えている。また、コロナ収束の状況を見ながらにはなるが、市内の料亭と市民向けの企画の打合せもしている。料亭文化の支援にもなればと考えている。

(遠藤 課長)

目標設定は市議会・執行部でも共通課題になっている。たくさんお客さんを増やすことは大切だが、施設の運営費との関係性もあり一義的に増やせばよいというだけではないことも認識いただきたい。

クリスマスマーケットは、観光庁の方に目標設定したのが来場者5,000人だったが、主催の観光コンベンション協会からは目標クリアしたと報告を受けている。

観光との連携、非常に重要な視点。以前、古町の料亭のみなさまとお話させていただいた時、新潟市民に対してと観光客に対してとでは視点が違う。文化施設においても同じ。いかにコミュニケーションを取りながらお互い利益になるようなかたちで進めていくかが重要と思っている。引き続きご指導いただきたい。

(本井 副会長)

いっぴん展の催しはひとつの工夫としてよかった。どういうものを所蔵しているのか、所蔵したいと思っているのかも分かる。学芸員も人間だから好みもある。どういうものを所蔵しているのか自分たちが知らないとなにもならない。持ち駒の色々な性格を引き出す努力を小さいながらも続けていく。それは今後のためにも、博物館のためにも当然のこと。コロナ禍であちこちへ収集に出かけていくのも難しいだろうから、自分の手元足元を見直すいっぴん展のような企画はバージョンを変えて続けていって欲しい。

(橋本 委員)

冒頭館長挨拶で、予算削減、人員削減の話があったが、ICOM（国際博物館会議）の中でもコロナ禍で、その時期は95%の館が閉館になり、スタッフ削減も報告があった。人員削減は予算措置によるものか。

(小林 副館長)

予算削減によるもの。

(遠藤 課長)

新潟市は来年度まで集中改革期間で、文化スポーツ分野に限らず様々な分野が対象となり影響を受けている。聖域はなく見直しされている状況とご理解いただきたい。

(橋本 委員)

コロナ禍の対応で、おうちミュージアムなど、インターネットを使ったバーチャルミュージアムの話があったが、一方でハンズオン機能というか、現物を触って本物の実在感を触覚で確かめるのも大切。

今年パラリンピックも予定されているが、視覚障がい者などへの配慮として、触れる展示はあって然るべき。難しいとは思いますが、国立民俗博物館で全盲の学芸員がいる。弱者への配慮などは失わないように。

プロジェクションマッピングで、夜間閉館したとのことだが、最低1回くらいナイトミュージアムを開催してもよかったのでは。以前にもやったことはあっ

たので、連携取って入館者数増につとめていただけるといいと思う。

いっぴん展だが、似たような展示を県外の施設でやられていた時には、学芸員の顔写真・イラスト・プロフィールなどがあった。普段の展示では接することがない学芸員を身近に感じられる配慮があってもよかったのでは。

(池田 会長)

学芸員はいつも裏で頑張っているけど紹介がない、という意見ですが。

(小林 副館長)

シャイなスタッフが多い。そういう話もあったが、今後検討したい。

ナイトミュージアム。先ほどプロジェクションマッピングで来館者増に繋がらなかったと説明したが、閉館直前に入られるお客様は居た。今後連携して1時間でも2時間でも工夫していければと思う。

(伊東 館長)

館が投影場所になっているので、カーテンも閉め館を暗くしないと実施できなかった。

(渋川 委員)

懐中電灯を持って回るのも面白い。

(橋本 委員)

新潟大学のあさひまち展示館でナイトミュージアムを開催したとき、館には人骨標本が結構あったので、懐中電灯を持って回ってもらったことがあった。工夫してできると思う。

(池田 会長)

いろいろご提案があったのでご検討いただきたい。

(本井 副会長)

夏休みの小学生の自由研究の発表は今も教育センター主催で続いているだろうか。どこかで一般公開されていけばいいが、こちらを貸館で発表の場としてもいい。それっきりで終わってしまうのはもったいない。また1回きりでは面白くないが、何回も続けていると、特に自然観察などは継続的なデータ収集になり環境が変わっていくこともうかがえる。毎年同じテーマが別の子どもによって掘り返されてもいい。むしろそうなってほしい。その中から企画に繋がる種探しを

して活用してもいい。教育センターの方で過去データをどうしているかは分からないが、そういうものはかけがえのない、新潟にとっての貴重な記録になりうる。

子どもだけでなく、親がおそらく一緒になって取り組んでいると思う。親にとってもいい経験なので、やりっぱなしにしないような企画をお願いしたい。

(池田 会長)

親にも目覚めてほしい、そういう企画も考えてほしい、また、蓄積していくことも大事だという意見ですが。

(小林 副館長)

教育センターの情報は把握していないので、確認したい。

近くの日和山小学校では社会科学習で地域のことを色々と調べていて、その授業発表の場として当館で2回展示をしている。子どもたちの研究発表の場として施設を利用していただくのは非常にいいことだと思う。

(坂井 委員)

自由研究は市のセンターで、理科の方は冊子になってまとまって蓄積されている。最近の流れでは中学校で自由研究は宿題にならなくなってきた。決まったかたちの中で何かやるのではなく、自分たちで考えてやるように変わってきている。

来年度から中学校の指導要領が変更になり、自分で課題を設定していく。中学生の中には歴史好きな子は居るので興味関心を引くようなネタがあれば、こちらに来て調べて発表するということはできると思うので、そういった部分で資料提供・題材提供などの提案を学校の方へしていただきたい。

(羽生 委員)

委員になったことをきっかけにみなとびあのボランティアに参加させていただいた。それまで全く歴史博物館の活動に興味なかったが、色々な活動があることを知り、自分も体験のボランティアに何度か参加した。こども歴史クラブというのがあり、その時参加の子どもは4～5人だったが、“ひとつ大切なものを持ってきてください”という活動があった。そのものに関して、いつ、誰からもらったものか、写真も入れて説明資料を作成し、まるで学芸員の仕事を体験するようだった。そういった場を提供してもらって子どもたちをうらやましく思った。

もう少し足を運ぶ回数を増やすのが大事ではないか。学校などの団体ではなくて親と一緒に足を運ぶのがよい。博物館に興味を持ってもらうように、こうい

うことをやっていると知らせてもらえば、機会も増える。活動の中でみなとぴあの敷地のどんぐり拾って削ってクッキーづくりもした。少人数だったが非常にいい活動をしていると感動した。

(池田 会長)

館にそういう工夫・活動を求められているという発言ですね。

(佐藤 委員)

こちらの施設はかなり換気がよい施設だと思う。新津美術館で聞いた話だが、常時外気を取り込んでおり、何十分単位で空気が全て入れ替わるとのことだ。そういうことをお知らせすることで来館者が安心して観覧できるのでは。

(小林 副館長)

そこまで案内することはしていなかったのもそういう宣伝もしていきたい。本日の会議も扉を開けて開催しているが、当館の空調は1時間に3回自動で換気している。実際は窓を閉めていても実は空気が新しくなっている。一般の方にもお知らせしていく。

以上